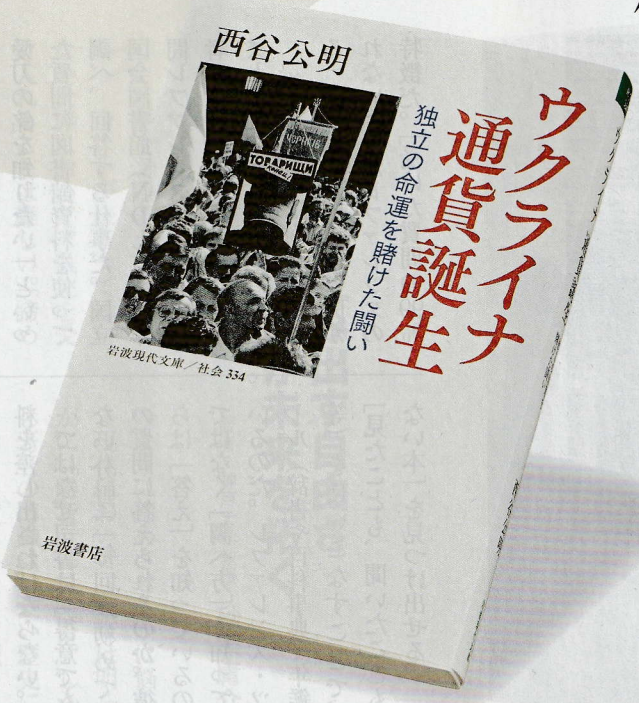
今週のもう1冊

ウクライナ通貨誕生

独立の命運を賭けた闘い

西谷公明 著

岩波現代文庫
1232円／300ページ



Profile

にしたに・ともあき
1953年生まれ。エコノミスト。早稲田大学大学院修了。87年長銀総合研究所入社。92年ウクライナ最高会議経済改革管理委員会メンバー、96年在ウクライナ日本国大使館専門調査員。トヨタ自動車などを経て2018年にN&Rアソシエイツを設立。

ソ連の影響が色濃く残る中でルーブル圏からいかに脱出したか

評者・早稲田大学教授 **柿沼陽平**

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻開始から1年が過ぎた。日々の戦況は伝えられてくるが、背景はなおも見えにくい。

ロシアとウクライナは結局いつ、なぜ、いかに戦うに至ったのか。その歴史はどのように絡み合い、なぜ解きほぐすのが難しいのか。核兵器も使用されかねない現状は、本来人類が真っ先に解決すべき問題のはずで、日本にとっても両国の歴史的関係を理解するのは肝要だ。

歴史の理解を進めるには経済の話が欠かせない。また関連する事件の真相を知るには、現場調査を重ねるべきだ。だが、ソ連崩壊後のウクライナで政界や経済界に食い込みつつ、さらに両国の問題を分析してくれる日本人など、そうそう現れるものではない。

著者はその希少な人材の一人だ。ウクライナ政府がいかに旧ソ連のルーブル経済圏からの脱却と、新通貨フリブナの創設を図ったのかを、実体験に基づき活写している。

軍需産業の一大拠点としてソ連を支えたウクライナは、軍事費増額に伴うルーブル増発のせいで、インフレに悩まされ、独立後にクーポン制を導入した。そして共和国経済をロシアから守ると同時に、西側民間銀行との相互決済体制を整えようとした。

一方でウクライナはエネルギーの大半をロシアに依存していた。また政策の基礎となる統計資料も信憑性を欠き、銀行システムも未整備で、数々の不整備と不法行為に悩んでいた。さらに政府は国内の物不足を恐れる一方、外貨を稼ぐ意思が希薄だった。クーポン導入以降、外国商人は稼いだクーポンをルーブルに換えねばならず、ますますウクライナ市場から遠のいていった。フリブナの導入も困難を極めた。政府は紙幣増加や偽造防止策に苦慮し、搬入予定月直前までどの印刷設備に依拠すべきか悩む始末。

もとよりソ連はモノ中心の統制経済を布き、その影響はソ連解体後も各地に残った。ウクライナ通貨当局がマネーサプライを通じてマクロ経済を運営しようとしても、民間では勝手に現物取引が行われている。マクロ政策は機能不全に陥り、インフレに見舞われる。ゆえに国民はルーブルを志向したが、ウクライナは独立のため、ルーブル圏からの脱出を敢行した。

政府は国民国家として独立を図ったが、ウクライナの東部と西部とでは歴史的背景も経済構造も異なる。西部は西欧、東部はロシア経済と密接な関係にあった。またロシアはかねてビザンツ帝国の継承者を自任し、クリミアやイスタンブールを奪取対象と見なしている。

かくしてウクライナでは、首都キーウ主導でなく、むしろ西部の各都市の自生的資本蓄積を原動力として資本主義化が進んだ。それがウクライナとロシアのイデオロギー闘争と絡み、各地でいびつな対立と発展を生んだ。

本書は、こうした数々の問題に対して、ウクライナの政治家や経済学者が苦闘する姿を見事に描いている。初出は1994年で、このたび「追記」付きで再刊された。それによれば、ウクライナ問題の背景にはなお東部と西部の不一致があり、著者はプーチンを批判すると同時に、NATOの安易な介入をも批判する。真剣に考えるべき問題だ。

かきぬま・ようへい 1980年生まれ。早稲田大学卒業。同大学院文学研究科に進学し、2009年に博士（文学）。早稲田大学助教、帝京大学准教授などを経て現職。専門は中国古代史、経済史、貨幣史。